

一 位置と環境（第1図）

文蔵貝塚は熊本県宇土郡三角町大字中村字文蔵2317番に所在する。三角町が所在する宇土半島は、全体的に急峻な地形を示し、半島の大部分は標高100～200mの範囲に含まれる。半島の北側は有明海に面し、比較的緩かな海岸線を形成している。この海岸線沿いには、半島付け根部の小沖積平野以外にまとまった平地はほとんど見られず、丘陵がそのまま海に落ち込んでいる地形である。一方不知火海に面している南の海岸線は、小さな岬と入り江が交錯して、特に複雑な様相を呈している。岬は小丘陵がそのまま海に突き出たもので、急激な角度で海に落ち込んでいる。また入江の奥には小さな平地が認められ、現在の集落はこの平地を中心に形成されている。

文蔵貝塚の周辺はこのような南海岸の地形を端的に示している。文蔵貝塚は、南の海岸線に向かって伸びる丘陵の東側裾部に位置し、この丘陵から東に伸びる小さな舌状の張り出し部の先端に立地している。文蔵貝塚の立地する丘陵の東側にも同様の丘陵がある。その両丘陵の間にある郡浦川の流域は現在細長い平地であるが、これは明治年間の干拓によるもので、江戸時代までは比較的大きな入江であった。文蔵貝塚はこの入江の中ほどに位置し、旧海岸線までは数十mの距離である。

遺跡がある場所は現在蜜柑畑と宅地として利用され、畑と宅地の境の切り通し断面に貝層が露出している。当初は現在第1貝塚と呼んでいる貝塚のみが知られていた。しかし調査の結果四つの貝塚と住居址を有する遺跡が確認され、文蔵遺跡群と呼ぶ方がふさわしいが、ここでは遺跡台帳に登録されている文蔵貝塚の名称を用いた。

三角町内では先土器時代の遺跡・遺物は知られていない。縄文時代では十ヶ所ほどの遺跡が知られているが、その多くは貝塚である。数ヶ所知られている弥生時代の遺跡も貝塚が多い。これらの遺跡のうち調査が行われた縄文前期の際崎貝塚、縄文中・後期の浜ノ洲貝塚以外は若干の遺物が採取されているだけである。弥生時代の遺跡でも洲の上貝塚・小崎貝塚等で後期土器片が採取されているだけで詳細は不明であるが、現時点では熊本の平野部に比べると貧弱な文化内容である。以上の縄文・弥生時代における遺跡のほとんどは入り江周囲の丘陵裾部に立地している。

一方、古墳時代においては、三角町及びその周辺地域は熊本県内の古墳密集地域の



第1図 周辺主要遺跡分布図

1. タタラ平製鉄跡 2. 石だたみ製鉄跡 3. 川原製鉄跡 4. 観音岬石棺群 5. 要古墳群 6. 千房製鉄跡 7. 柳迫製鉄跡 8. 湯殿製鉄跡 9. たたらん迫製鉄跡 10. 北平製鉄跡 11. 城山製鉄跡 12. 平野製鉄跡 13. なぎさこ製鉄跡 14. 小島崎首塚古墳 15. 中河原製鉄跡 16. 古郷池製鉄跡 17. 官迫製鉄跡 18. 打越南貝塚 19. 西木の浦古墳 20. 西木の浦貝塚 21. くの迫貝塚 22. 小田良古墳 23. 平松古墳群 24. 金桁古墳 25. 洲の上貝塚 26. 塩屋浦製塩址 27. 大田尾遺跡 28. 古氷貝塚 29. 重盛山古墳群 30. 際崎古墳群 31. 際崎貝塚 32. 磯山古墳群 33. 鬼塚古墳 34. 道の峯貝塚 35. 道の峰製鉄跡 36. 浜ノ洲貝塚 37. 小崎貝塚 38. 鬼塚古墳 39. 辺田貝塚 40. 辺田古墳群 41. 大崎古墳群 42. 寺島古墳群 43. 千崎古墳群 44. 桐ノ木尾ばね古墳 45. 梅ノ木貝塚 46. 弓田貝塚

一つである。三角町内だけでも 100基近く、古墳が確認されており、そのほとんどが宇土半島南半と戸馳島西半に見られる。当地域で特徴的な古墳は、明確な墳丘を持たず箱式石棺を内部主体とするものと、いわゆる石障系の古墳である。これらを含め当地域の古墳のほとんどは岬の突端かその近く、ないしは海を望む丘陵上に位置している。また古墳時代後半～歴史時代にかけての特徴的な遺跡として、製鉄・製塩遺跡をあげることができる。前者は当地域がいわゆる花崗岩バイラン土地帯に属し、鉄分を多く含んだ土地であることと係りが深い。製鉄遺跡のほとんどは文蔵貝塚のあるあたりから内陸部にかけて見ることができる。製塩遺跡は天草型製塩土器を出土する遺跡で、現在数遺跡が発見されている。さらに中世には縄文・弥生時代のものと同様の立地の下に貝塚が形成されている。調査されているものはないが、道の峯貝塚・打越南貝塚等数遺跡が確認されている。(坂口)

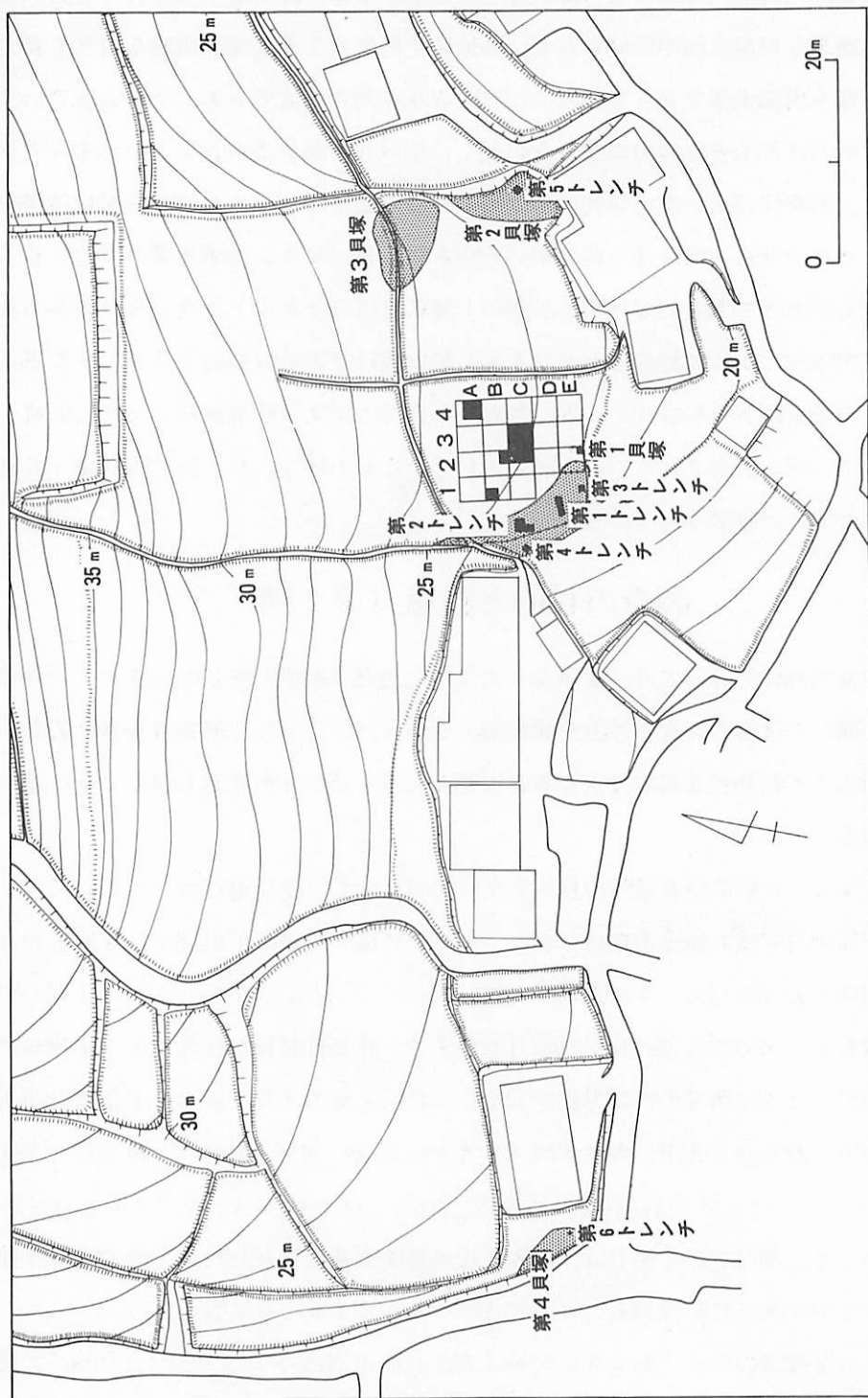
二 調査の目的と経過 (第2図)

従来、弥生時代については、稲作文化であることが強調されるのが常で、その他の食料に関しては顧みられることが比較的少なかった。しかし、植物質食料(穀類)を補う意味での動物質食料の役割もある程度大きかったことが考えられるようになってきている。

文蔵貝塚は、比較的保存状態の良い弥生時代の貝塚で、動物遺存体、さらにはドングリ等の植物遺存体の検出が期待された。また、貝塚の背後の平坦部には住居址の存在の可能性もあったため、発掘調査を実施した。

発掘調査は、1983年3月27日から4月4日まで、計9日間行われた。まず蜜柑畑内の小空地部分に4m四方の柵目方眼を設定し、北から南へアルファベット、西から東へ算用数字を附した。まず、A-4区(3×3m)、B-1区(2×2m)、C-3区(4×4m)、E-3区(1×1m)を発掘したが、いずれのグリッドにも貝層は認められなかった。ただC-3区では、住居址状の遺構が発見されたため、その性格を知るべく、B-2区(2.5×1.5m)、C-2区(2.5m×4m)を拡張した。

次に、貝層確認のため、第1トレンチ(3×1m)、第2トレンチ(1×3m)、第3トレンチ(1×1m)、第4トレンチ(1×1m)を設けた。第1トレンチでは西側



第2図 地形測量図

1×1 m部分の貝層のブロック・サンプリングを行った。さらに貝層の広がりを見るために、東側に1.5×1 m拡張した。第2トレンチでは甕形土器1個体分と骨片数点がトレンチ東壁の北側で出土したため、トレンチの東側へ1×1.4 m拡張した。

また、周辺の踏査を行った結果、他に三ヶ所の貝塚が発見された。上述の貝塚を第1貝塚とし、第1貝塚の東約50 mの地点にあるものを第2貝塚、第1貝塚の北東約50 mにあるものを第3貝塚、第1貝塚の西約110 mの地点にあるものを第4貝塚とした。貝塚の堆積状況や性格を確認すべく、第2貝塚に1×1 mのトレンチ、第4貝塚に0.5×0.5 mのトレンチを設定した。(松原)

註 木村幾多郎「北部九州の弥生時代貝塚」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982

三 第1貝塚

(1) 概要

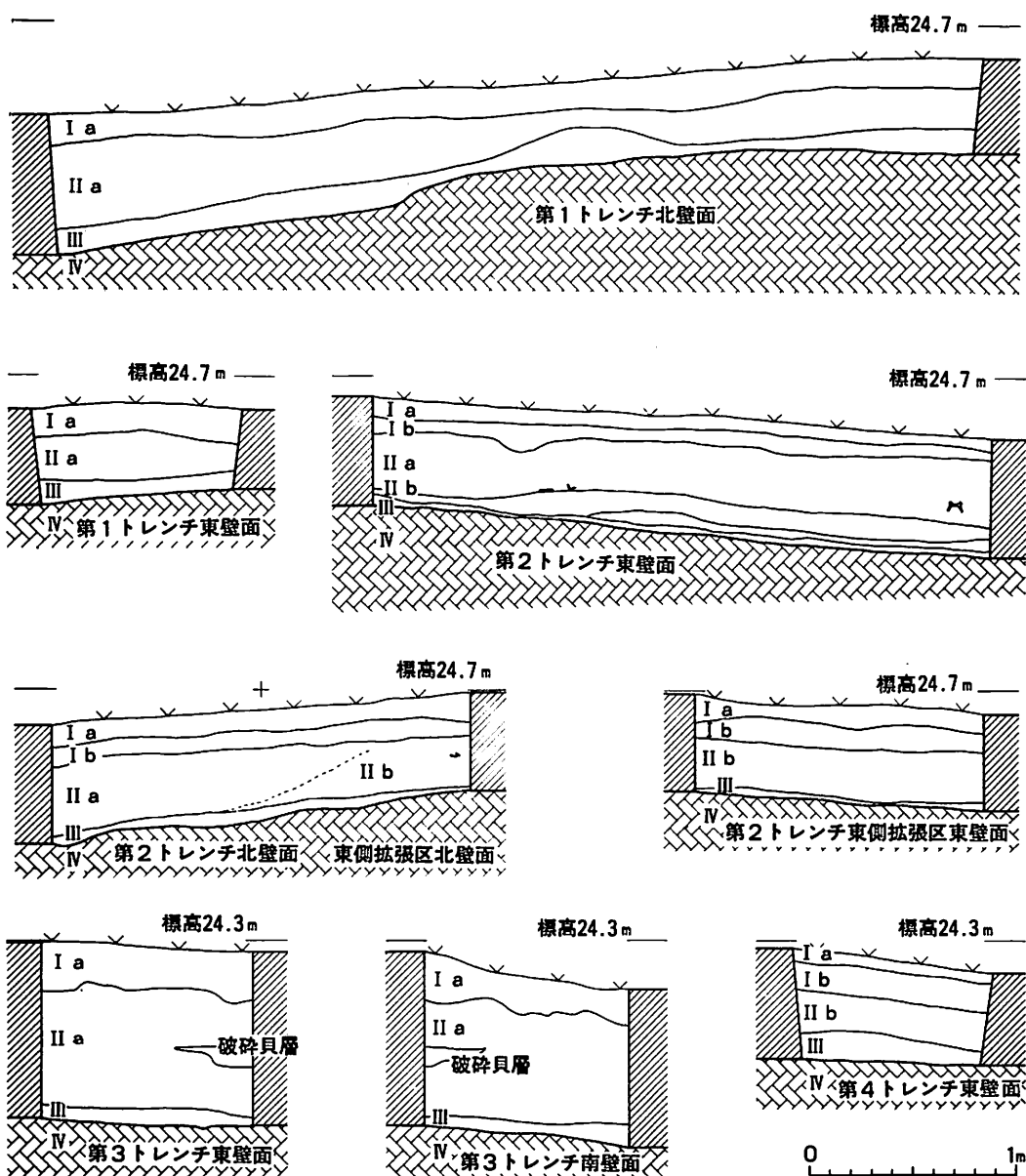
第1貝塚は前述のごとく以前より知られていた遺跡であり、郡浦川に面した南向きの丘陵裾部に立地している。現在は蜜柑畑となっているが、宅地造成や開墾のため貝塚の西側と南側は削り取られ、一部貝層が露出している。現状では南北約20 m、東西約6 mの規模をもつ。

(2) 層序(第3図;図版2～4)

第1貝塚では第1～4トレンチの四ヶ所で発掘を行ったが、各トレンチとも堆積状況はほぼ同様であった。層は全体的に北東から南西へ緩かに傾斜しており、5層に大別できるが、I層(表土)及びII層(貝層)は、それぞれI層a・b、II層a・bに二分される。IV層(地山)を除きすべての層から遺物が検出されたが、II層aが最も豊富であった。

I層a;表土層であり、耕作による攪乱を受けている。暗褐色を呈し、樹根が多く、破碎された貝の細片を若干含む。土器・磁器の細片が出土した。

I層b;樹根をほとんど含まず、破碎された貝の量が多い点でI層aと区別される。暗褐色を呈し、耕作による攪乱を受けている。弥生土器片・獣骨片が出土した。



第3図 第1貝塚土層断面図

II層 a ; 攪乱を受けていない純貝層である。土をほとんど含まずマガキを主体とするが、部分的にスガイ等の小型巻貝やハイガイの集中しているのが認められた。遺物量は最も多く、弥生土器片・獣骨片・魚骨片が多数出土し、鉄片も数点出土した。また、貝殻の中には火を受け、炭が貝殻に付着した状態で検出されたものもあった。

II層b；II層aと同じくマガキを主体とした貝層であるが、黒褐色土を多少含んでおり、混土貝層とも呼べる層である。第2・4トレンチに認められた。第2トレンチでは東から西に向かうにつれ、II層aとの境界が不明瞭になる。また、東壁側にはII層bの最下部に貝を踏み固めたような薄い層が認められた。遺物量は比較的多く、弥生土器片・獣骨片・魚骨片・炭などが出土した。

III層；黒褐色を呈し、粘性が強い。破碎された貝を若干含んでいる。弥生土器片・獣骨片が主に上部から出土し、比較的多くの炭が検出された。

IV層；地山である。赤褐色を呈し粘性が強く、堅くしまっている。（明瀬）

（3）出土遺物

①土器（第4・5図；図版7・8）

土器は主にII層aから出土した。器形は甕形・壺形のものがほとんどである。口縁部の形態や文様などの差異により、甕形・壺形土器をそれぞれⅠ～Ⅳ類に分類した。

甕形土器 Ⅰ類（1～8・33）；口縁部上面が内側に向かって傾斜し、「く」字形口縁に近い形状であるが、口縁部内面に突起状の張り出しをもつ。3はこの張り出しが特に強く、内側への傾斜が弱いため「T」字状口縁に近い形状である。口縁部上面が平坦なもの（3・8）とわずかに凹むもの（1・2・4・5・33）とがある。口唇部はほとんどが丸く成形するが、8はやや尖り気味である。33は完形品で頸部下約4cmの位置に沈線を一条めぐらす。胴部はわずかにふくらみ砲弾形に近い様相を呈する。底部は厚みのない脚台で、脚台部の内面上部は広く面取りし、砂粒が付着する。^{註1}

Ⅱ類（14・16・28・31・32）；口縁部が「く」字形で先端に向かって長く伸びるものである。28の口縁部は短めで頸部に厚みをもつ。

Ⅲ類（29）；1点だけ出土した。「く」字形に強く屈曲する口縁部であるが、屈曲する部分が非常に厚く、そこから口唇部と胴部に向かって薄くなる。屈曲部の直下に断面三角形の凸帯を一条めぐらす。

Ⅳ類（11）；丹塗り磨研土器で1点だけ出土した。口縁部内面に縦方向の暗文を数条施す。

甕形土器底部（23・24・25）は全て脚台であるが、23は大きめで厚みがあり、24は

33の底部に近い。いずれも脚台部内面上部に砂粒が付着する。25は長く伸びた脚部の一部であると思われる。

壺形土器 I 類（9・10・12）；朝顔形に開く口縁部をもつものである。9は口唇部を尖り気味に整形する。12は口縁部の立ちあがり強く、先端近くでわずかに外反する。

II 類（30）；口縁部の形態はI 類に近似するが、内外面には縦に帯状に丹を塗った文様が数条見られ、頸部には断面三角形の凸帯をめぐらす。19は部位が不明であるが胎土・焼成・色調・文様などが30に近似し、同類の可能性もある。

III 類（13）；1点だけ出土した。胴部の張りが極めて強い無頸壺である。口唇部近くに径3mm程の孔を穿つ。焼成も他のものと比較して極めて良好である。

IV 類（15）；北部九州系の丹塗り磨研壺と思われるもので、1点だけ出土した。山鹿市大道小学校遺跡出土の類例^{註2}などから見て、袋状口縁壺の頸部から肩部にかけての破片と考えられる。

胴部片（18・20・21・22）は数点出土したが、いずれも断面三角形もしくは断面台形の刻み目凸帯をめぐらす。頸部片（17）は刻み目凸帯を一条めぐらすもので、1点だけの出土である。底部片（26）は平底である。

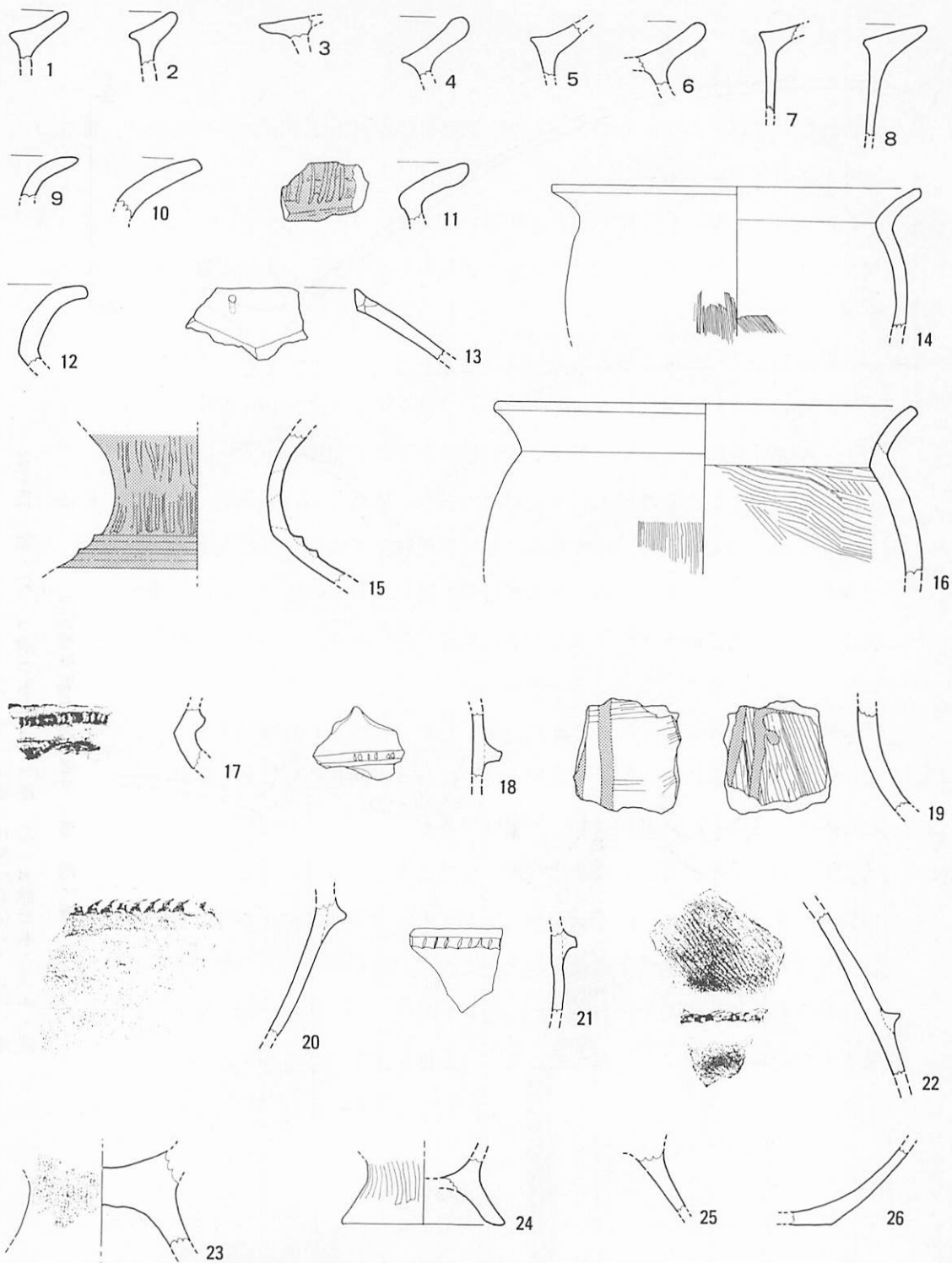
甕形土器・壺形土器以外に、高坏の口縁部と思われるもの（27）が1点出土した。内側へわずかに張り出し、上面平坦に成形する。口唇部は面をなし、「コ」字形に近い。

甕形土器I 類は黒髪式土器系統の土器で、「く」字形口縁をもつ甕形土器II 類はこれに後続する系統の土器と思われる。33の完形品は「く」字形口縁に極めて近い口縁部をもちながら、内側に黒髪式土器に見られる様な張り出しを残すものと考えられる。

（古賀）

註1 脚部を整形する際に粘土などで雌形を作り、型抜きをし易くするために砂粒を撒いたため、これが付着したのではないかという考えがある。緒方勉「黒髪式土器雑考」

『谷頭遺跡』谷頭遺跡調査団 1978



第4図 第1貝塚出土土器実測図(1)

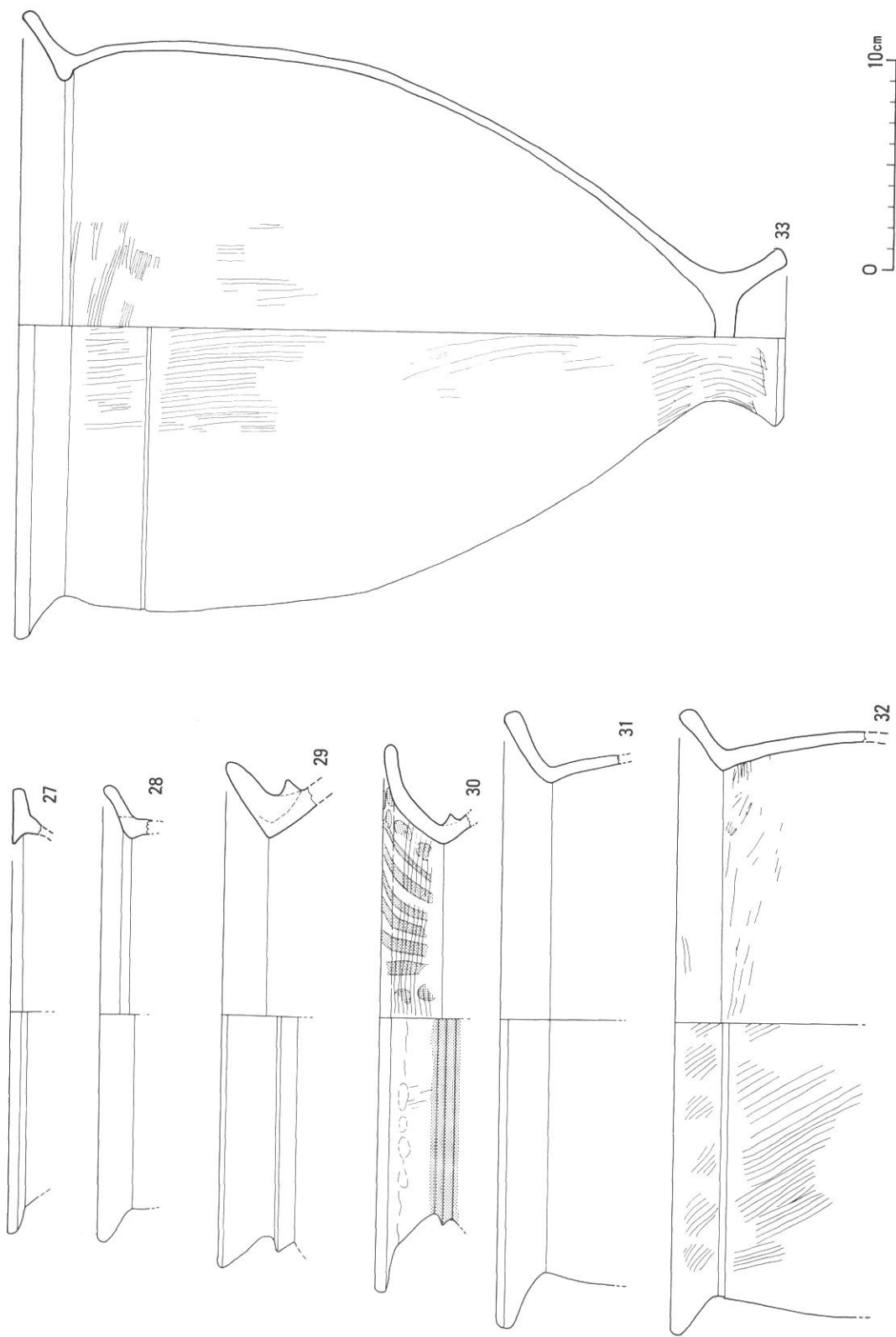
0 10cm

第1トレンチII層a : 8・15・16・25 第1トレンチIII層 : 6・10・21・22

第2トレンチI層b : 17 第2トレンチII層a : 1・2・3・7・12・19・20・26

第2トレンチII層b : 4・5・23 第2トレンチIII層 : 24 第4トレンチII層b : 9・14

第4トレンチIII層 : 11・13・18

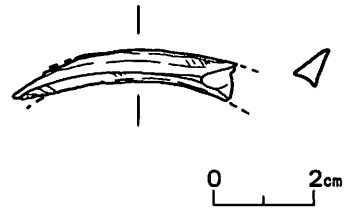


第5図 第1貝塚出土器実測図(2)

第1トレンチII層 a : 29 第2トレンチII層 a : 27・28・30・33
 第2トレンチ東側拡張区II層 b : 31・32

②鉄器

第1トレンチより鉄鍬の茎の小片が1片と、各トレンチより鉄片が少量出土した。鉄鍬片は残存部の長さ約3cmで、断面は方形を呈している。



③貝輪（第6図）

第6図 貝輪実測図

ブロック・サンプリング中より、貝輪の小片が1片出土した。内側周縁は一部欠損し、裏面の一部も剝落している。全体に丁寧な研磨を施している。タマキガイ科の貝を使用しているが、種まではわからない。

④自然遺物

今回の調査では微細な自然遺物採取のため、第1トレンチの西側で1×1mの規模のブロック・サンプリングを行い、発掘調査後水洗した。その結果発掘中に出土したものを含めて、第1貝塚では貝・獣骨・魚骨・魚鱗・炭化した木の実・木炭が出土し、そのほとんどはII層からの出土であった。このうち木の実は長さ約1cmのドングリであるが、水洗中の不手際によって破砕してしまい同定不能であった。また木炭のほとんどは小さなもので、これも同定できなかった。従ってここでは貝・獣骨・魚骨・魚鱗について述べる。

〈貝〉同定し得た貝は19科35種で、それらは以下のとおりである。

腹足綱		
リュウテン科	スガイ	<i>Lunella coronata</i>
ニシキウズ科	イシゲタミガイ	<i>Mondonta nigerrimus</i>
	ヒメクボガイ	<i>Omphalius nigerrimus</i>
	クマノコガイ	<i>Chlorostoma xanthostigma</i>
ウミミナ科	ウミミナ	<i>Batillaria multiformis</i>
	フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i>
ヤマタニシ科	ヤマタニシ	<i>Cyclophorus nerklotsi</i>
アクキガイ科	イボニシ	<i>Thais clavigera</i>

	レイシ	<i>Thais bronni</i>
	オニサザエ	<i>Chicoreus asianus</i>
テングニシ科	テングニシ	<i>Pugilina ternatana</i>
	オニニシ	<i>Pugilina tuba</i>
ツタノハ科	マツバガイ	<i>Cellana nigrolineatu</i>
ムカデガイ科	リュウグウカズラ	<i>Serpulorbis Xenophorus</i>
リュウテンサザエ科	サザエ	<i>Batillus cornutus</i>
オナジマイマイ科	ウスカワマイマイ	<i>Acusta despecta</i>
キセルガイ科	不 明	
アズキガイ科	アズキガイ	<i>Pupinella rufa</i>
オカチョウジガイ科	不 明	
アマオブネガイ科	ヒメカノコガイ	<i>Pictoneritina oualaniensis</i>
斧足綱		
イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	スミノエガキ	<i>Crassostrea rivularis</i>
	イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>
フネガイ科	ハイガイ	<i>Anadara granosa biseneasis</i>
	サルボウ	<i>Anadara subcrenata</i>
	カリガネエガイ	<i>Barbatia virescens</i>
	マルミミエガイ	<i>Striarca tenebrica</i>
マルスダレガイ科	アサリ	<i>Tapes japonica</i>
	カガミガイ	<i>Dosinia japonica</i>
	ハマグリ	<i>Meretrix lussoria</i>
	チョウセンハマグリ	<i>Meretrix lamarcki</i>
	ウスハマグリ	<i>Pitar japonica</i>
	マツカゼガイ	<i>Autigana lanellaris</i>
イタヤガイ科	イタヤガイ	<i>Pecten albicans</i>
フナガタガイ科	タカソデモドキ	<i>Trapezium sablaerigatum</i>

また第1トレンチで行ったブロック・サンプリングにおける出土貝の数量は以下のとおりである。

イタボガキ科	3606個体	73.25%
スガイ	1008個体	20.48%
インダタミガイ	66個体	1.34%
フトヘナタリ	59個体	1.20%
レイシ	40個体	0.81%
ウミニナ	25個体	0.51%
ヒメクボガイ	23個体	0.47%
ハイガイ	22個体	0.45%
その他	74個体	1.50%

○この統計の数値は完形品あるいはそれに近い個体のみを数えたもので、小破片はこれに含めていない。イタボガキ科のものは特に小破片が多く、全個体数に占めるイタボガキ科の割合はさらに多くなるものと思われる。

○イタボガキ科のうちイタボガキはブロック・サンプリングでは出土していない。またマガキとスミノエガキは良く似ているため、すべての個体を両者に分離することは難しく、ここでは両者をあわせた個体数を掲載した。

○その他にはオニサザエ・テングニシ・ヤマタニシ等15種の貝を含んでいるが、いずれも20個体以下である。

○斧足綱の数量は殻数を2で除したものである。

第1貝塚で出土した貝は上記のようにマガキ・スミノエガキが圧倒的に多く、本貝塚はこの種の貝を主に採取していたことがわかる。ただしスガイを中心とする小形巻貝とハイガイは径20cm程度のブロック状に発見されており、これらの貝はまとめて投棄していたことがわかる。またカキには焼けた痕跡を有するものが少ないのに対し、小形巻貝のほとんどに焼痕が認められる。

〈獣骨〉出土した獣骨はそれほど多くなく、中程度のビニール袋1袋程度である。しかもその多くは細片で、同定し得たのはニホンジカ (*Cervus nippon*) の上下顎骨と四肢骨、イタチ科の顎骨である。獣骨片の中には鋭利な刃物で切られた痕跡を有するものも多い。

〈魚骨・魚鱗〉魚骨は多くがブロック・サンプリングによって出土したもので、ほとんどが細片である。顎骨・歯以外は部位もわからないものが多い。同定し得たのはマダイ (*Chrysophrys major*) とカサゴ科の一種だけである。また水洗によって約100枚の魚鱗が出土したが、種別は不明である。(米倉)

四 第2・3・4貝塚(第7・8図;図版5)

(1) 第2貝塚

第2貝塚は第1貝塚の東約50mの地点にあり、マガキを主体とした貝層が南北約18m、東西約8mにわたって広がっている。ここでは貝塚の中心部に1×1mのトレンチを設定した。

第2貝塚では層は5層に分かれ、層全体が北西から南東へ向かって傾斜している。

I層は表土層であり、暗褐色を呈する。II層は貝の細片を含む暗褐色土層である。

Ⅲ層は黒褐色土を含んだ貝層であるが、貝はかなり破碎されている。Ⅳ層は貝片を含まない黒褐色土層であり、Ⅴ層は赤褐色の地山である。

遺物はⅡ・Ⅲ層より出土した。人工遺物はⅡ層からは弥生土器片及び少量の磁器片が、Ⅲ層からは弥生土器片が出土した。

弥生土器（第8図）は2・6・8がⅡ層より、1・3～5・7・9・11がⅢ層より出土した。このうち甕形の土器は口縁部の形態から、口縁部が「く」字形に屈曲するもの（1・3・4・9）と、同じく「く」字形に屈曲するが内側に張り出すもの（2・5・11）の2つに分けることができる。後者は口縁部内面がくぼみ加減になる。

壺形は7のみであった。6・7は刻み目凸帯を有する胴部片である。色調で分けると、灰褐色のもの（1・3・8）・黒褐色のもの（4）・黄褐色のもの（2・5～7・9・11）の三種があり、焼成は良好である。胎土は、すべてに雲母片を含むが、6及び7には石英が含まれている。調整はナデ及びハケによってなされている。なお1・3・4・9は第1貝塚出土土器分類のⅡ類、2・5・11はⅠ類に相当するものである。この貝塚は出土土器より弥生時代中期末葉～後期初頭頃に形成されたと思われるが、遺物出土状態より、Ⅱ層は後世に攪乱を受けたと思われる。

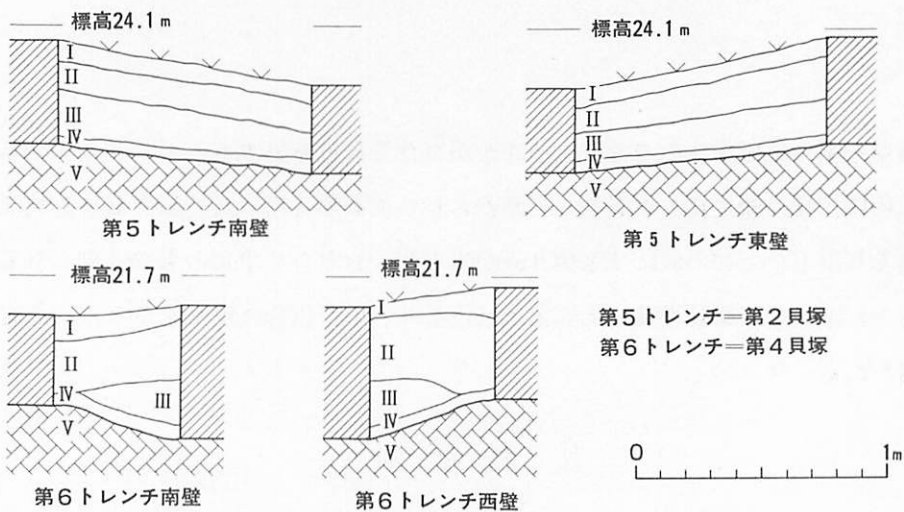
（2）第3貝塚

第3貝塚は、第1貝塚の北東約50mの地点にあり、南北約10m、東西約15mにわたって貝層が広がっている。未発掘のため、詳細は不明である。

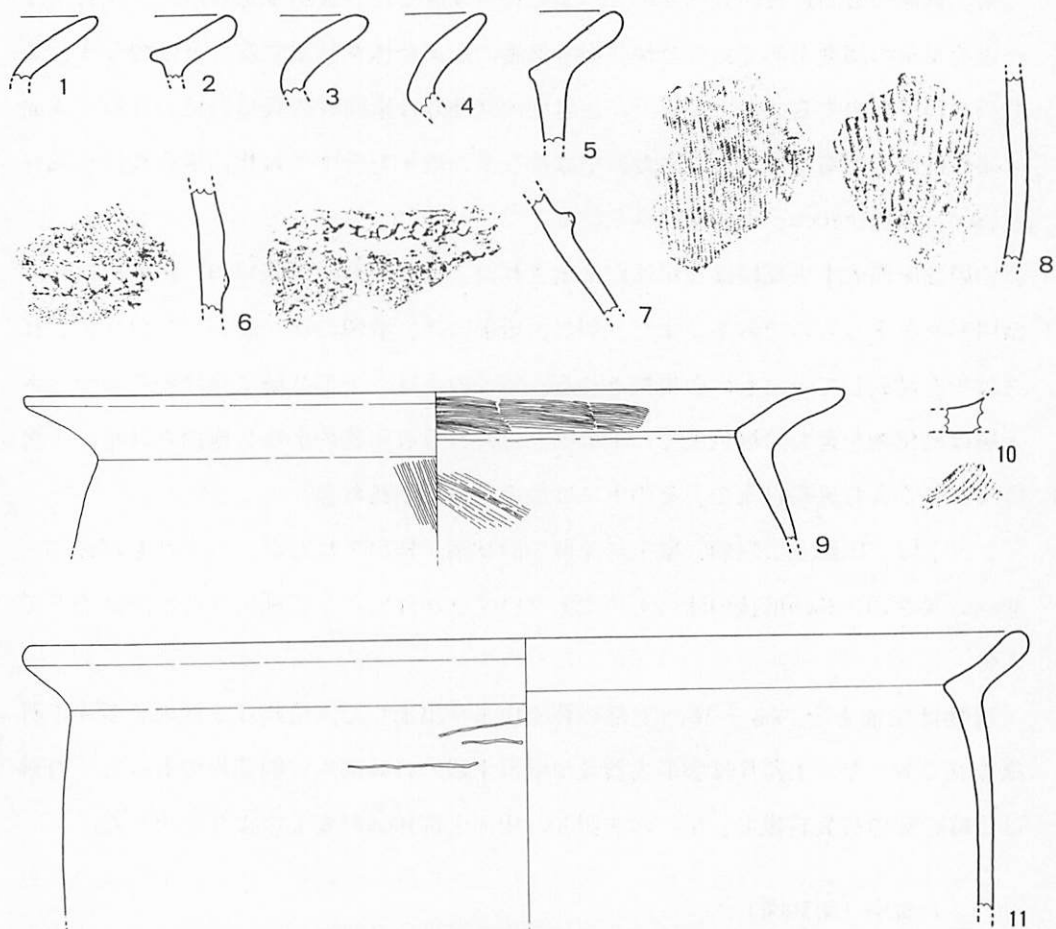
（3）第4貝塚

第4貝塚は第1貝塚の西約110mの地点にあり、南北約4m、東西約12mにわたって貝層が広がっている。第1、2貝塚と同じくマガキが主体であるが、総じて第1貝塚のものよりやや小ぶりである。ここでは貝塚の中心部に0.5×0.5mのトレンチを設定した。

第4貝塚では層は5層に分かれ、層全体が北から南へ傾斜している。Ⅰ層は黒褐色を呈する表土層である。Ⅱ層は貝の細片を含む黒褐色土層である。Ⅲ層は黒褐色土を含む貝層である。Ⅳ層は貝片を含んだ赤味がかった黒褐色層であり、Ⅲ層とⅤ層の漸



第7図 第2・4貝塚土層断面図



第8図 第2・4貝塚出土土器実測図

第2貝塚II層：2・6・8

第2貝塚III層：1・3・4・5・7・9・11

第3貝塚III層：10

移層をなす。V層は地山であり、赤味がかった黒褐色を呈する。

遺物は、貝の他にII・III層より土師器らしい土器片(10)及び須恵器片が出土した。III層より出土した10の底には糸切り痕がみられ、おそらく中世のものと思われる。

この貝塚は、堆積状況及び土器出土状況より、中世以降に攪乱を受けたものであると思われる。(馬原)

五 住居址

(1) 概要(第9図;図版5)

第1貝塚の東側10mのB-2・C-2・C-3区で住居址が確認された。住居址は一辺約4mの隅丸方形であったが、樹木保護のため全体を確認することはできず、3分の2程を検出するにとどまった。住居址の立地点は南向きの緩傾斜地のため、床面は僅かに南へ傾斜している。また、壁はかなりの削平を受けており、現存高は、北側壁18cm、西側壁20cm、東側壁14cmを計る。

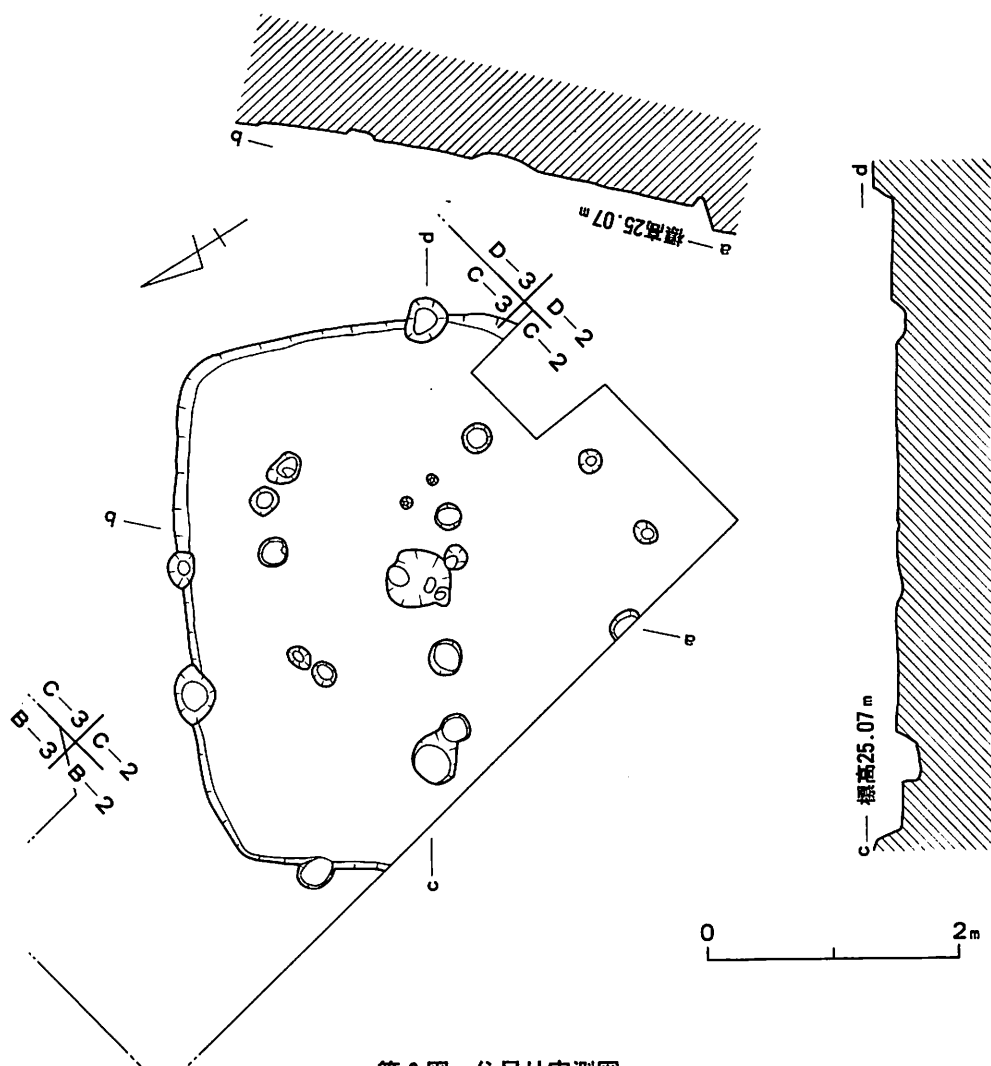
住居址床面の中央部には、炉址が検出された。長径52cm、短径44cm、深さ約14cmの楕円形を呈するものである。また、炉の周辺部には、数個の礫が散在しており、これらは炉を構成していたものと推察される。炉址の土は、上下2層に分けることができ、上層は炭化物を含む暗褐色土で、木の実と思われる炭化物の小片が検出された。下層は炭を多く含む黒褐色土で、その下には焼土が検出された。

ピットは、床面上に14個、壁上に4個の計18個が検出されたが、いずれも直径15～30cm、深さ10～25cm前後の浅いものでありいずれが柱穴として利用されたかは不明である。

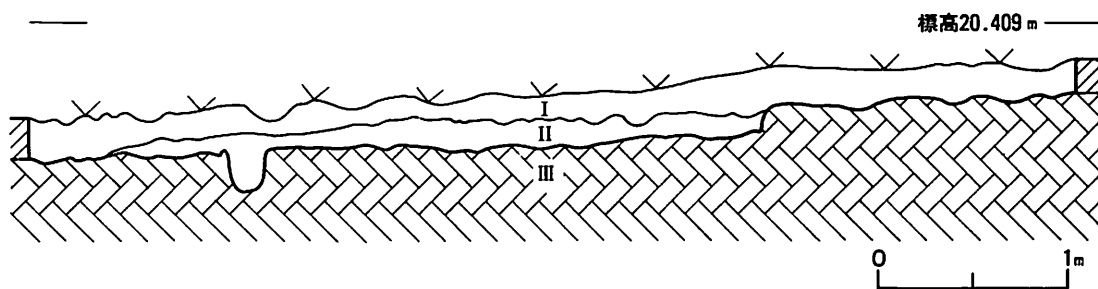
遺物は床面とその5～10cm上部の覆土中より出土した。遺物は少量の土器片と石鏃1点であった。土器片は甕形土器及び壺形土器の口縁部片、胴部片であった。石鏃は黒曜石製の打製石鏃で、炉址の北側30cm床面上部10cmの覆土中より出土した。

(2) 層序(第10図)

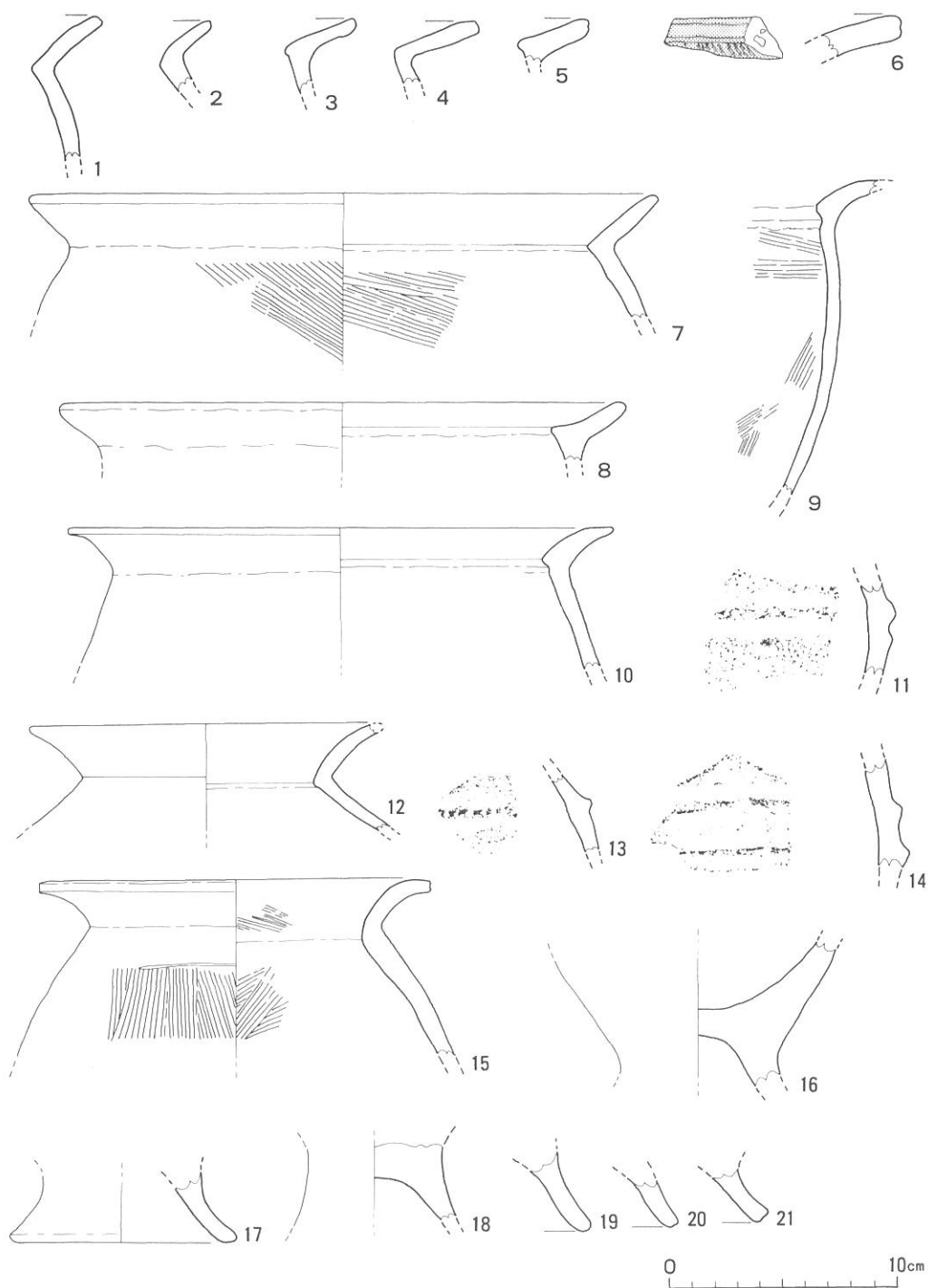
B-2・C-2・C-3区の層序は3層に分けられる。



第9図 住居址実測図



第10図 C-2グリッド西壁土層断面図



第11図 住居址出土土器実測図

I層：2・3・9・14 II層：1・4・6～8・10・15・16・20・21

床面直上（II層最下部）：5・11～13・17～19

I 層；厚さ15～20cmの黒褐色を呈する腐植土（表土）である。

II 層；厚さ10～15cmの黒褐色土と赤褐色土の混土層で、粘性があり、この層が住居址の覆土である。

III 層；地山であり、この地域特有の花崗岩のバイラン土で、赤褐色を呈する。

（3）出土遺物

①土器（第11図；図版8）

住居址からの土器の出土数は少なく、全体の器形をうかがえるものはなかったが、

土器は口縁部の形態から甕形土器（1～10・15）、壺形土器（11～14）及び甕形土器底部（16～21）に分けられる。

まず、甕形土器は、口縁部が大きく外反して「く」字形を呈し口唇部に面をもつもの（1～5・7）、口縁部は「く」

字形に大きく外反するがその先端部は

細く水平に伸び口縁部内側に張り出し

をもつもの（10）、口縁部は「く」字形

に外反するがその傾きは小さく、口縁

上面が僅かにくぼみ口縁部内側に張り

出しをもつもの（8）に分けられる。

16～21は甕の底部で、全て脚台である。

16は脚部先端を欠き、内面上部には砂

粒が付着している。20・21は脚部先端

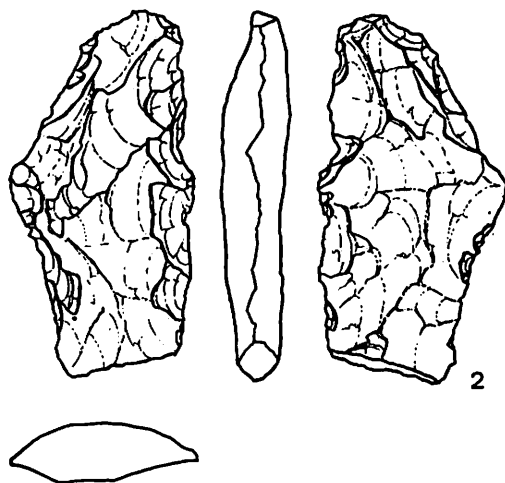
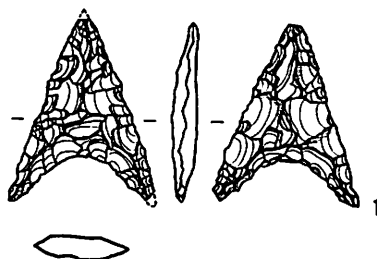
が直線的に開き、器面は赤褐色を呈し

雲母片を多く含む。12・15は壺形土器

口縁部片で、11・13・14は壺形土器胴

部片である。12は胴部の張りが強く、

口縁部は丸みをもって大きく外反し「く」



第12図 出土石器実測図

1：住居址覆土

2：A-4グリッド表土

字形を呈する。器面は赤褐色を呈し、薄手である。15は12と同様大きく外反し「く」字形を呈する。外器面には頸部から胴部にかけて目の細いハケ目がみられる。器面は暗褐色を呈し、焼成は良好である。11・14は二条の断面三角形の凸帯を有する。11の凸帯下部には、ナデ調整による凹線が一条めぐる。13は一条の断面三角形の凸帯を有し、凸帯には浅い刻み目が施してある。

住居址出土の土器は、出土地点が覆土中と床面直上に分けられたが、出土位置の違いによって形態に違いがみられることはなかった。住居址出土の土器は第1貝塚出土土器の分類に基づけば、8は甕形土器Ⅰ類、1～7・9・10・15は同Ⅱ類に、また12・15は壺形土器Ⅱ類に位置づけられる。

②石器（第12図）

石鏃が1点住居址の炉址北側30cm・床面より10cmの位置より出土した。黒曜石製の無茎凹基式の打製石鏃である。丁寧な剥離を施してある。先端部を欠き現存長は2.3cm、最大幅1.8cm、厚さ0.4cmを計る。

③住居址外の出土遺物（第12図）

A-4、B-1、E-2の各グリッドでは出土遺物はほとんどなく、各グリッドで数片の土器片と、A-4グリッドから石器が1点出土したのみである。

石器は安山岩製で、一見石槍状の形態を成すが基部の形態が異り、スクレイパーの可能性もある。一部パティナが新しい剥離面があり、あるいは前代の石器を再利用したものかもしれない。（茂山）

六 ま と め

文蔵貝塚の眼下を流れる郡浦川流域に広がる低平地は、江戸時代までは遠浅の入江であったと伝えられるが、貝塚はこの入江に向かって突き出した小さな張出し部の先端に残されており、あたかも住居址周辺の斜面に貝を投げ棄てたかのような観を呈している。さらにその西側の波多川等の流域には多くの貝塚が残されており、その中には文蔵貝塚と同じような立地条件を示すものも少ない。また、それらの貝塚から採集されている遺物を見ると、縄文時代のものから歴史時代のものまでが含まれており、当地域における貝塚形成が、断続的にはあるが、時代をこえて続いていたことを窺わせる。

今回の調査に先立ち、二つの大きなテーマを掲げた。一つは貝塚調査による動植物遺存体の検出を通じての当時の食生活の復元であり、もう一つは貝塚に関連する住居址等の遺構の確認である。これら二つのテーマについては、今回の調査で一応の成果を収めることができたものと考えている。

貝塚は当初一ヶ所のみと思われていたが、その周辺に新たに三ヶ所の貝塚の存在が認められたので、これらに第1～4貝塚の名称をそれぞれ与え、第3貝塚を除く全ての貝塚に対して発掘調査を実施した。これら四つの貝塚のうち、第1～3貝塚については、それらが住居址を取り巻くように残されていること、また第1・2貝塚と住居址の出土土器が類似することから見て、住居址とほぼ同一時期の所産であると考えられる。第4貝塚はこれらからやや離れており、歴史時代の土器片が出土した。しかし層の状態からみて、弥生時代の貝塚が後世に攪乱をうけ、再堆積したものである可能性も強い。

さらに、一軒のみではあったが、竪穴住居址を検出した。蜜柑畑であるため完掘することはできなかったが、おそらく一辺4 mの方～長方形を呈するものと考えられる。住居址床面中央部には地面を掘窪めただけのいわゆる地床炉があり、炉を囲む状態でピットが点在する。これらのピットの大部分は柱穴であると考えられるが、その配列は不規則であり、家屋構造の復元までには至らなかった。熊本県下では、谷頭^{註1}遺跡や矢護川日向^{註2}遺跡などで当該期の竪穴住居址が多数発見されている。両遺跡では方形と

円形の住居址が検出されており、平面プランやその規模等にはバラエティーが見られる。当遺跡の方形住居址も大きさ、設備などに多少の変異を示しており、この時代の住居址の追求に一資料を加えたと言うことができよう。

以上の貝塚・住居址等から出土した遺物は、自然遺物を除くと、そのほとんどを土器が占めており、他には石器・鉄器が数点と、二枚貝を利用した貝輪1点が出土しているのみである。

土器は第1貝塚と住居址で特に多量に出土したが、いずれもほぼ弥生時代中期後半から後期初頭に編年されているものである。この時期の熊本地方の土器に対しては、「黒髪式土器」という総称が与えられているものの、その内容には不明確な点が多い。最近、それを整理・編年された西健一郎氏の説に拠るならば、当貝塚の出土土器は弥生時代中期後葉のもの（甕形土器Ⅰ類等）後期に下るもの（甕形土器Ⅱ類等）とに分けられよう。また、当遺跡で出土した丹塗り磨研土器は北部九州で中期後半に位置付けられているものに類似しており、時期的にも矛盾するものではない。

出土した石器のうち、定形化した利器としては黒曜石製の打製石鏃があるのみだが、他に安山岩製の不定形な石器が出土している。前代の石匙様のものを再利用している可能性もあるが、石槍ともスクレイパーとも決し難い。他に自然石を利用したものや、黒曜石の小片も少数あったが、石器とするには今ひとつ確証に欠ける。鉄器は製品として鉄鏃の茎が1点出土した他は、鉄片が数点出土したのみである。いずれにせよ、土器の量に比べると、石器・鉄器等の利器の極端に少ないことが本貝塚の特徴として挙げられよう。

第1貝塚では第1トレンチでブロック・サンプリングを行ったが、その結果に拠れば、貝塚を構成する貝類のうちマガキ、スミノエガキが全体の7割強、次いでスガイが約2割を占めており、その他の貝は極めて少数である。この数字が第1貝塚全体の貝の構成比を示すことは無論であるが、第2～4貝塚でもカキが目立っており、文蔵貝塚の形成時に遺跡附近がカキの大繁殖地だったことを物語っている。また、スガイを始めとする小形の巻貝はハイガイ等とともに、カキの貝層中にブロック状に固って堆積しており、特にスガイは火を受けて変色しているものが目立つ。

魚骨・獣骨は量的に貧弱であり、また小片のため同定できなかったものもあるが、

文蔵貝塚では本来的に魚類・鳥獸類の捕獲は貝類のそれに対して補助的にしか行われなかったとみられる。このことは、それに必要な道具が少ないことにも窺える。

以上が調査の概要である。今回調査した四つの貝塚はいずれも半壊しているが、住居址と合せて見てもその規模は小さく、また生活に必要な利器も少い。また貝層も一部を除くとカキを主とする一枚の層であり、出土土器も形態に差はあるものの、特に層位的な上下関係を示してはいない。これらの事実は全て、当遺跡が短期のうちに形成されたものであることを物語っているが、特に貝層のほとんどをカキが占め、また出土土器の中でも甕形土器が特に目立つことから考えれば、当遺跡に於てカキを中心とする貝のムキ身を生産したという可能性も指摘できよう。地域は異なるが、佐賀平野に在り弥生中期を中心とする遺跡である本分貝塚^{註4}は、スミノエガキを主体とする点などで当貝塚とよく似た内容を持っている。本分貝塚の性格として「漁撈的な面で、より専門的な村落」という表現がとられており、その周辺にも同様な貝塚が群をなしている。直ちに当貝塚と同一視するわけにはいかないが、当貝塚の性格を考える上で看過できない遺跡であろう。

いずれにせよ、弥生時代の貝塚に対する本格的な研究や調査はまだまだこれからの分野であり、以後の調査・研究を待って当貝塚の性格や地域的な位置付け等について更に検討して行かねばなるまい。

(吉武)

註1 谷頭遺跡調査団 『谷頭遺跡』1978

註2 九州電力株式会社・日向遺跡調査団 『矢護川日向遺跡調査報告』1980

註3 西健一郎 「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会 1983

註4 佐賀県立博物館 『本分貝塚』佐賀県立博物館調査研究書(第7集) 1981